

「社団法人」国際MRA日本協会 設立記念レセプション開かる



インディラ・ガンジー、シーク教徒の凶弾に死すの報は、ワシントンの真夜中のベッドで聞いた。「ショックだった。が、意外ではなかった。そして、レーガン大統領やサッチャー首相は、危機一髪難を逃れたの



今日の顔

にどうして彼が——と、RAは、第二次世界大戦中を思った。「国際MRA(道徳再武装運動)の日本協会が社団法人となったのを機に招かれ、「核時代の平和と日本の道義的責任」について講演するため来日した。Mに、幅広い支持者がいる。

来日したマハトマ・ガンジーの孫
ラジモハン・ガンジー
Rajmohan Gandhi

「戦後、独仏の歴史的和解やブラックアフリカの独立など、いろいろ盛開期問題が平和的に解決された際には、MRAの働きがあった。私は、いわばMRA連立方の祖父がマハトマ・ガンジーより大卒。ワリ1の国際ジャーナリスト。印巴問題研究のためワシントン滞在。四十九歳。

動の芸術家なんぞに、世界に必要なのは準備の拡張ではなく、モラルのRの掲揚者、アックマン博士と偶然出会った。わずかに十分間の立ち話で、祖父の遺志を継ぐのは「これ」と心を決めたといっ。しかし、その祖父マハトマガンジーも、三十六年前のヒンズー教徒の銃弾に倒れた。宗教対立だけでは、手を止まらぬまじる民族、カーストなを、インドの悲劇を生む土壤となっている。



● 記念講演の講師ラジモハン・ガンジー氏の来日を告げる読売新聞(12/9日付)。

「社団法人国際MRA日本協会 設立記念レセプション」

は、十二月三日(月)午後六時から東京の帝国ホテル孔雀東の間において、内外の各界を代表する約五百名の参加を得て盛大に開催された。

「戦後の日本の国際社会復帰のパイプ役を果たし、混乱した日本の進路に方向性を与え、経済復興の奇跡の一翼を担ったMRAの新しい門出を激励する」(挨拶文)というこのレセプションの発起人名簿には、稲山嘉寛・大槻文平・加藤シヅエ・岸信介・土光敏夫・日向方斎・宮田義二の発起人代表七名のほか、政界・経

済界・労働界・学界・在日外交団を代表する約七十名の方々が名を連ねた。

第一部の記念講演では、インド独立の父マハトマ・ガンジーの孫でMRAの世界的指導者ラジモハン・ガンジー氏が「核時代の平和と日本の道義的責任」というテーマで講演した。

第二部では、「スライドでつづるMRAの歴史」上映、発起人代表の挨拶に引き続き、深谷隆司衆議院議員が、中曽根総理のメッセージを読み上げ、

ついで監督官庁の文部省を代表して鳩山邦夫文部政務次官が祝辞を述べた。これに対して社団法人国際MRA日本協会の高瀬会長が謝辞を述べ、木村睦男参議院議長発声による乾杯のあと懇談に移った。

会場には二十ヶ国を代表する海外代表の方々も出席し、MRAならではのなごやかなダイアログの輪が広がった。社団法人国際MRA日本協会副会長で難民を助ける会会長相馬雪香さんが、アジアにおける連帯の呼びかけを行なったあと、カンボジア難民の小中学生による耶子の殻を使った民族舞踊が演じられ、このレセプションに花を添えた。



●乾杯の音頭をとる木村睦男参議院議長。

社団法人国際MRA日本協会 設立記念レセプションへのメッセージ

内閣総理大臣 中曽根康弘

混迷と対立の絶えない世界情勢に鑑み、平和国家としての我が国の責務は以前にも増して極めて多大なものがあります。

この時にあたり、道義に基づいた相互信頼作りを目指す社団法人国際MRA日本協会の設立は、誠に喜ばしく意義深いことと存じます。

日本の国際社会復帰のパイプ役を果たされた「戦後の恩人」としてのMRAの動きを、私も昭和25年にスイスのMRA世界大会に参加した折に、直接目のあたりにする機会を得ました。

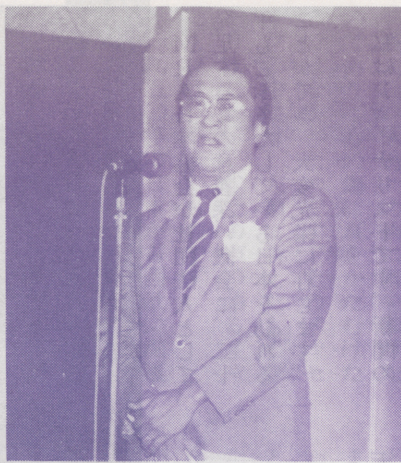
今回の社団法人設立にあたり、人種・階級・宗教・国家の違いを超えて国と国との潤滑油の役割を果たすMRAの新たな出番と貢献を心から期待し、私の御挨拶といたします。

昭和59年12月3日





● 発起人を代表して挨拶する加藤シツエ元参議院議員。婦人参政権や家族計画の先駆者で、29年間議員として激動期を乗り越える際に精神的支柱となったMRAの実践を、熱っぽく語りかけた。



● 祝辞を述べる鳩山文部政務次官。祖父鳩山一郎総理とMRAとの親交もスライドで紹介された。



● 中曽根総理のメッセージを読み上げる深谷隆司衆議院議員。



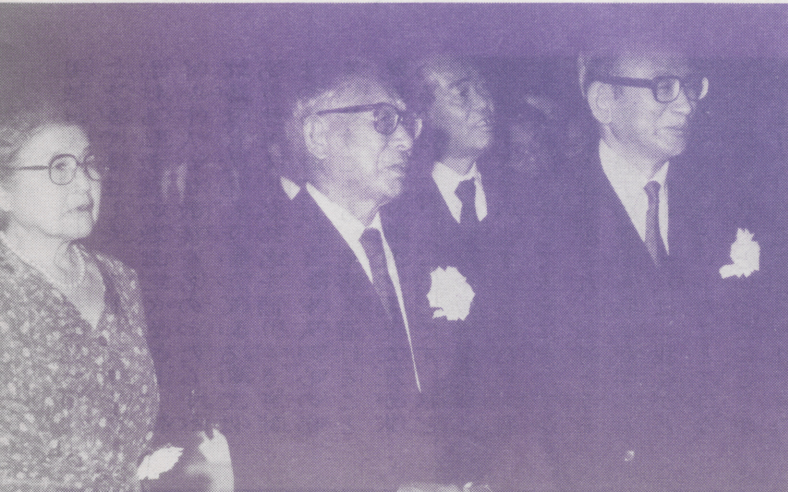
● 謝辞を述べる高瀬会長。

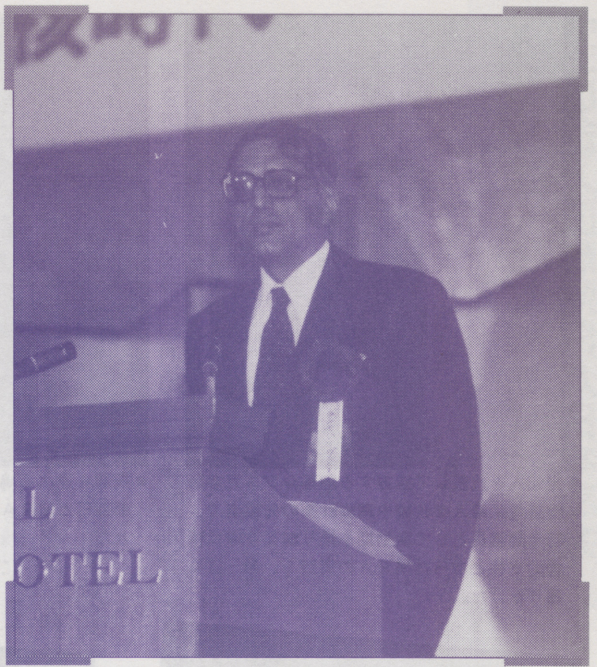


● 経済界を代表して挨拶する住友電工阪本勇相談役。国際派経済人として、地道な相互信頼の必要性を説いた。他にも日清製粉正田英三郎名誉会長、国鉄仁杉巖総裁、ジャスコ岡田卓也会長、清水建設野地紀一会長の顔も見られた。

● 広島浜井市長、中曽根康弘衆議院議員、石坂泰三氏とともに、昭和25年にスイス・コーのMRA大会に出席した渡辺忠雄三和銀行名誉会長夫妻と湯浅佑一湯浅電池社長。

● オーストリア大使夫妻、レバノン大使、西ドイツ大使、モロッコ大使、ザンビア大使、ジンバブエ大使、ケニア大使、イスラエル大使を含む15ヶ国の外交官が出席した。





“核時代の平和と 日本の道義的責任”

講師：ラジモハン・ガンジー
(講演要旨)

復讐をせよ”という声に耳をかたむけてはいないでしょうか。

一九四七年八月十五日、インドはヨーロッパの統治から解放されました。それは新聞の見出しになり、多くの歴史書にも書かれました。しかしこの年は、多くのイスラム教徒がヒンズー教徒が、そしてシーク教徒が互いに殺しあい、片輪にされ、拷問された年でもあります。そうすると、この一九四七年は、勝利の年というより、辱しめの年として、歴史書に残ることになるかもしれません。

一ヶ月ほど前、インディラ・ガンジー首相が暗殺されました。この事件も、またここ数ヶ月の間にインドで起こっている惨劇の数々も、一九四七年と同じ愚かさから発したものです。その時も今も、私どもは憎しみや仇うちが、あたかも徳であるかのように考えているからです。一九四七年の悲劇は、長い間の復讐、恨み、仇討ちの結果です。この仇の鎖は何世紀にもわたる長いものです。天のみが真実を、またインド人の性ともいべき暴力を知っています。だからこそ、仏様はインドで誕生されたのでしょうか。

インドは、輸出があまりうつくあ

MRA日本協会が社団法人として発足するこの意義深い機会に、二十年もごぶさたしている日本を訪れることができ、大変光栄に存じます。

私はジャーナリストです。新聞の見出しに見る限り、MRAが世界各地で何をしているかということを読み取ることは不可能です。しかし、人の心が大きく育って、今まで敵対関係にあった人々が、国々が和解したなら、これは歴史になります。

レーザーの開発でノーベル物理賞をうけたチャールズ・タウンズ氏は、次のように言っています。

“ある美しい春の朝、私はワシントンの公園のベンチに座り、つじを見ながらいろいろなことを考えていました。そのうち、フトある考えが浮かんで……”

天の与えた美しい春の朝、神と人間が創りあげたつじの花を愛でながら、思考し、模索し、耳をかたむけた時、「永遠」の声が彼に語りかけ、レーザーが生まれた、というのです。私どもの多くは、不思議なことを、あたかも当り前のことと受けとめてしまいがちです。靈感が与えられても知らぬ顔をして考えようとしな

わりに「昨日」に、そして「昨日の

りませんが、仏様を世界に送り出すことができました。今日、インドにおける仏教徒の数はごくわずかです。インド人が仏教徒を名のつたらすべがよくなる、と語っているのはありません。仏の名を語り、ささげまつるだけでは、インド人の心の傷をいやすことも、危害を避けることもできません。印度の渴^かえた土が求めるのは、「許しの慈雨」です。私どもは、過去の憎しみや憎悪を大事に抱えて生きています。このため、過去が現在に、そして未来にとつてかわり、我々は支配され、奴隷となるのです。過去の影から我々が学べるものといったら、それは「我々がどうあるべきか」といったことではなく、「宿敵は誰か」といったことしかありません。歴史にとらわれた身の私どもには、公園のベンチにすわって「永遠」の声に聴く心の自由がありません。そして「昨日」についてい耳を貸してしまいます。日本は輸出国です。いつの日か日本の皆様が、「憎しみと敵対心を捨てる」という仏様の秘訣をインドに輸出して下さるのを待ちたいと思います。

日本の皆さんは、過去の過ちやよろかから学ばれた国民です。皆さん方の多くは、「何故あのようなあやまちをおかしてしまったか」という

おおよけ

ことを、心ひそかに、または公の場で自問されてきました。自分の非を認め、悔い、償うことで過去から解放された経験をお持ちです。憎しみの鎖から解き放たれ、傷ついた自尊心から解放された時に、日本は世界を驚愕させた経済革命をおこすことができました。広島原爆記念碑に「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから」と刻まれた時、皆さんは「永遠」の声を傾けたのであり、心の傷に耳をかたむけたのではなかったのです。そのメッセージの中には、人類に訴えたものがありました。「永遠」の声を語るメッセージは、不変のものです。

一九五〇年に日本から西欧に派遣された代表団の方々は、米国の上院議会でこう言われました。「日本は過ちをおかしました。」この謙虚な言葉は、サタデー・イブニングポストをして「アメリカも自らの過ちを認めることができるかもしれない。我われもでたらめをおかしてしまっただけ……」と書かせたのです。この日本のグループの中には、未来の日本の総理大臣中曽根さんもおられました。今年この中曽根首相は韓国に対して、「韓国に与えた苦悩を遺憾に思う」という非常にむずかしい言葉を述べられました。

被爆の経験

持っているのは日本だけです。だからこそ日本には、世界の核の悲劇を回避する特別な責任があるのかもしれない。核の化物をどうすれば追放できるか——これにはいろんな意見があります。しかし、それを越えて世界的なコンセンサスを見つける必要があります。平和な世界とは、単に武器の存在しない世界ではなく、恐れや憎しみ、どん欲さのない世界であろうと思います。無限に小さいものを追及していった結果、人は核を分裂させることに成功しました。人を融合させるためには、やはりこの無限の小さい存在「永遠」に耳をかたむける必要があるかもしれません。その時に初めて、皆さんが経験されたように、恐れや過去という鎖からとかれるのではないのでしょうか。そして私たちも過去の所産ではなくなり、むしろ過去の豊かな経験や体験を誇りに思うようにすらなるのです。

私のもう一人の祖父チャクラバテイ・ラジャゴパラチャリは、九十四歳で天命を全うしました。今世紀はじめ、祖父が英国統治下から祖国インドを解放させようとした若き闘士であったころ、日本が帝政ロシアを

打ち負かしたというニューア

ッペという近現代において、アジアが初めてヨーロッパに勝ったのだ、というはやる気持ちを、祖父は私にも、後には私の日本の友人にも語ってくれました。

この二十年、皆さんは西欧の強国といわれる国々と競争し、勝利をおさめました。しかし、勝利には重荷が付きものです。

皆さん方は、地域と世界の援助額を増やせ、防衛に寄与せよ、外交にもつと責任を持てと、多くのことを絶え間なく要求されています。日本のような実績をもった国は単に経済大国であってはならない、政治大国にもなれ、防衛責任を増やせ、ということなのでしょう。これらの要求や催促に、日本の皆さん方は一番よいと思われる方法で対処されるでしょう。言葉少なくして外交の実績を上げる——これは私どもインド人が見習うべき秘訣だと思えます。

他国への援助は、日本政府だけではなく個人のレベルでも多く行われていることを知っています。中には三菱総合研究所の中島正樹さんのように、世界の巨大な十二のプロジェクトに資金を供給する「世界公共投

●ガンジー氏の講演に聞き入る稲葉修元法相、竹本孫一前衆議院議員、森下元晴元厚相、鈴木強衆議院議員。各国外交官や小笠原日英尼公の姿も見られる。



資基金」設立の構想を打ちたてられた方もいらつしやいます。

ここで私に、十三番目のプロジェクトをつけ加えさせて下さい。それは私の十五年来の夢である「新しいカルカッタの街づくり」です。九百万人の老若男女でむせかえる街、路上で眠り路上で死んでゆく乞食の殺到する街として、またマザー・テレ

サの名で皆さんはご存じかもしれません。設計には至上の芸術を、建設には科学の粋を集め、未来を先どりした街をつくること——近代的な大量輸送機関が備わり、仕事も公園も住宅も病院もそして子供達の遊ぶ広場もあるニューカルカッタを、世界中の力と愛と闘志をつのって、今のカルカッタの近くに建てるのが私の夢でした。

私はいまだに、若い頃のこの夢を捨てきれずにいます。もしこれが実現すれば、世界で最も混雑していて貧しい街に新しい時代が到来するでしょう。このような変化があつてこそ、二十一世紀も有史三千年の到来も、大きな意義を持つてくるのです。

カルカッタから東に数マイルいったところに、インド亜大陸の中でも最貧国といわれるバングラデシュがあります。ここには、才能はあつても貧しい生活を強いられている何千万もの人々が住んでいます。ここにこそ、よき時代の到来を一番願っている人達がいるのかも知れません。インドとバングラデシュが国境を接するこの地域に、はちきれんばかりの希望を満載した街づくりを、鉄とコンクリートと花と緑で実現するた

めに、皆さん方に心をむけていただきたいと思ひます。

日本の皆さんは、コンピューターをより安く軽くすることを世界に教えられました。そこで、人の心をより大きくする秘訣を世界に教えること、これをも天職としていただけないでしょうか。

いろいろな分野で、日本の皆さんは地球のチャンピオンになられました。一週間前、私はアメリカのエール大学に学ぶインドの科学者に会いました。そして、「チームリーダーの日本人は、私よりずっと年上で賢い方ですが、はじめから私を一個の人間として平等に扱つて下さつて、どんなに嬉しくありがたいことか……」と話してくれました。

日本の皆さんは、産業や研究の分野で、チームのメンバーが家族のようになつて努力することを知られておられ、世界にも教えてもらいました。同様に、父が母が子供達が家族として、愛情を持つて融和し、平等と自由のもとに生きるといふことを世界に対して教えて下さいませんか。

ときどき、ものごとにあまり深く広く愛情を注ぎこんでしまつたら、心が破裂するのではないかと恐れをもつことがあります。見知らぬ人々を心に受け入れることで、私達の家族や国に対する愛情が犠牲になりはしまいかと恐れるのです。しかし私の体験から申しますと、私の心の中の家具や調度がたとえ粗末なものであろうと、その心の家に新しい方々や国を迎え入れた時、私の日頃愛する人々への愛情はより豊かになり、より親しくなれるようです。

日本が皆さん方の御国であるように、地球もまたみんなのものなのです。人類の叫びに応えていく、この時に、日本の豊かな心は、「永遠」の声に聞き従ふことによつてさらに強められていくでしょう。天から祖先から遺産として受けつがれた自然に、また自らの手で作りあげた美しい環境に、日本の皆さんが心を開かれ、その心の中に「世界」を大きくとりいれられた時、「永遠」の声は必ずや、皆様の心に語りかけるでしょう。

(通訳 原 不二子)



ガンジー氏の講演録が

英・日対訳で近く発行される予定です。

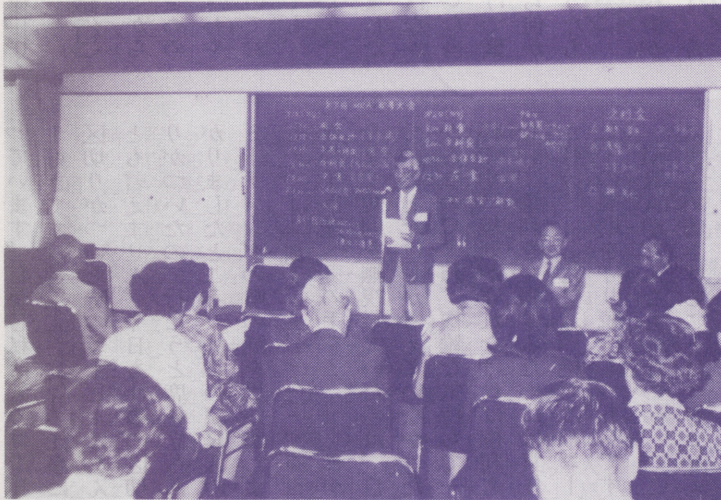
くわしくは事務局

(03-821-3737)へ

お問い合わせ下さい。

第7回 MRA関西秋季大会開催

(10月6・7日 神戸市
住友金属工業住吉研修所にて)



テーマは「対立から融和へ——国と国の対立も、家や会社の中の対立も、すべて人の心のなかに始まる。その原因は、おそれ、にくしみ、自己中心など、私たち一人一人のなかにある。相手に変わってほしいと思つたら、まず自分から変わること。そして自分が変わるその鍵は……?」

今年も秋晴れに恵まれ、緑住吉研修所に参加された方は八十人を越えました。

その中で、今年の夏スイスのMRA大会に参加して来た六人の中学生二年生の元気な姿が目をひきました。大阪では二十一世紀を迎えるにあたって、活力ある街づくりのための再開発が進められています。十六年後に日本の中堅となる年代の中学生に、スイスで国際的な体験をする機会が与えられたことは、街づくりにもまさる明るい希望です。

分科会は、「インドシナ難民を助ける会」をつくって世界に日本の良心のあかしを立てた相馬雪香さんや、「湯くインドに水を」とインドに井戸を掘る青年達を送る「アジア友の会」の菅田めぐみさんを中心にした「世界と日本」のグループ、前記の中学生や九州からのOLの方々が中心の若手グループ、そして、ごとう元専務の前川さん、小田原の呉服店社長の二宮さん、国鉄労働組合の玉川さん、前埼玉県議会議員・元国労婦人部長の榊さんたちによる「企業グループ」の三つです。毎年この会に参加される人も、今回はじめての人も、心を開いて体験を分かち合いました。

生活の一こま一こまに、また歴史

のそれぞれの頁には、必ず個人の選択があります。目先の小さな幸を追いかけるか、相手のために、また次の世代のためにいま新しい決意をするか、一人一人の選択が今後の世界を決めることとなります。

「新しい世界」をみんなであうたいました。♪新しい世界、決意をすれば今宵はじまる♪。兼松恵さんのころ暖まる、しかも確信にみちた解説で、カラスライド「MRAのABC」も見ました。

「口は一つなのに、なぜ耳は二つあるのでしょうか?」

「誰でも自分のことを主張しすぎます。神様は話すことの二倍、ひとの立場や神の声に耳を傾けるよう耳を二つにしました。」

ある人は心についたよごれを洗い落して生気をとり戻し、ある人は衰えた心に充電して明日への活力を蓄え、今年もまた見事な松茸ごはんを私たちが元気づけてくれた料理長さんに感謝して、二日間の会を終りました。

MRA日本協会関西世話人会

住友義輝

●浦井 百合子

(西日本相互銀行)

今日は、MRAを知りましてから出勤第一日目です。いつもねぎめの悪い私が、なんともいえないさわやかなめざめをし、自分でも驚いております。仕事をしておりましても、どこかいつもの自分ではないよう、なんとも不思議な妙気がしました。これが私の本来あるべき姿ではなかったろうか——まるで入行した当時のように純粹で、多少不安げで緊張した今日の自分、さあ今から何かが始まるのだという希望のようなのを感じました。

MRAを知ることにより、視野が広がったような気がいたします。今までは小さいことでウジウジ愚痴ったり、悩んだり、自分が嫌いな人はなるべく避けたりといった状態でしたが、自分の方から勇気を出して心を開くことよって、複雑だった人間関係がスムーズに流れてみると、これまでのことがうそのようです。自分の閉ざした心を開かない限り、相手の心も開かないのだということに改めて感じました。

私には今日決心したことがありません。私の課では、午後三時まではコーヒーを飲んではいけない規則にな

っています。しかし私は大のコーヒー好きです。イライラしたり、仕事に区切りがついた時のコーヒーはなんとも言えません。今日も仕事の区切りがついたので行こうと席を立ちあげましたところ、先日のMRAのミーティングの時の話を思い出しました。「飢えて苦しんでいる世界の子供達へ愛の手を！」——私がかいま規則を無視していたのは、自分のことだけしか考えていなかったからなのです。複雑な気持ちで一杯です。規則が守れなければ権利もない、権利を主張するためには責任が伴う……。私は今後、絶対このコーヒーの規則を守り続けるつもりです。

MRAがどんなものなのか、ここにまとめ書きすることはできませんでした。また、人に説明できるものでもないと思います。「自分がまず変わる」と、それによって人にも伝わっていくのではないのでしょうか。私自身これから少しでも多くの静かな時間を持ち、神の声を聞き、そして決意し行動していきたいと思っております。

●井上 セツ

(西日本新聞社)

ただ自分の生活の安定に満足して、余りにも利己的な恥ずかしい自分に

気づき、反省いたしました。

この世で生かされていることを当然のように受けとめて、感謝の気持ちを忘れて生活してしまいました。私、視野が狭く、小さな枠の中にとどまって、広く世界に目をむけなかった私、このめまぐるしい情報社会の中でなんとも不幸なことでした。周囲の恵まれた環境(新聞社勤務)にありながらもつたない次第です。

MRAの会合に参加してみて、自分の立場でできる何かを成し得たい(解答はまだ出ませんが……)、世界平和の祈りの電波を放ち、自分でもキャッチできるよう少しでも自分を変え、精神を向上させたいと思えました。まず身近なところに解決を見出すこと、またそのためにも呼び起こされた今の心を大切に育てたいと思えます。

毎朝起床したときの静かな祈りの中で湧き出づる声を大切に、微力でも広い世界に目を開いて、一步一步確実な足どりで歩んでゆきたいと考えます。

●天野 順子

(西日本相互銀行)

相手に期待せず自分を変えてみよう、という話がたとき、頭をガンと殴られたような気がしました。

あーそうだった。自分で良かれと思つて行動し、それがまわりの人に通じなかったとき相手ばかりを責め、どうしてこんな頑張っているのに報われないんだろうという気になつていた——そんな自分が恥ずかしくなりました。

そのあとの全体会議で相馬先生が、「自分を変えようと思つたら、他人のことをどうこう考えて批判しているひまがない。それどころじゃなくなるほど忙しくなりますよ。」と言われ、そうか、自分が忙しくなつてしまふものなのか、と思ひました。

研修を終え、物事に対して別の見方ができるようになつた自分を感じます。他人に対し、少しやさしくなつたような気がします。これだけでも、MRAの研修に参加した甲斐があつたと思つています。

●横田 幸子

(西日本相互銀行)

アフリカ難民や食料問題については、今まで新聞やテレビ、学校の授業などで聞いていましたが、自分にはまったく関係がない他の国のこと、としか感じていませんでした。いろいろな方のお話を聞いているうちに、「現実から目をそらしてはいけない。自分自身のこととして受けとめなけ

ればいけない。そうすれば、決して無関心ではられないはずだ。」と思うようになりました。

自分が変わることによって空気が変わる——なるほどと思います。私も空気が少しでも変わるように努力したいと思いつながら、今日で三日目です。今の気持ちを少しでも長く維持して、大切にしてゆきたいと思っております。



嫁と姑の問題

松井 きぬ

(兵庫県退職女教師連合会副会長)

私は早く夫を亡くして、息子と二人暮りでした。

息子は今の嫁と結婚したとき、「僕は、お母さんと一緒に暮らせる人というのを第一条件にしてい

た。今の人は、それを承知してくれただよ。」と言ってくれました。その時に、「いい息子だなあと自分ながら息子を高く評価しました。」

友達や親戚の方から、「もう少し良い家から、良い学歴の人が手にはいっただろうに。」という挨拶がありました。と申しております。しかし内心では、もう少しましなお嫁さんが来てくれた筈なのになあ、と思うこともありました。

ところが、親友がまいりまして「あなたんとこにエエ嫁さんあったなあ。」と言いますので、私ドキッと理由を聞きますと、「後家の一人息子と、財産のない家で一緒に暮らしてやろうなんていう嫁さんは、近代の若い女性ではほとんどないよ。エエ嫁さん当たったねえ。可愛いがつてやりなさいよ。」と言うのです。私はショックでしたが、ア、そうか、そういう見方もあるんやなあと思いましたが、

しかし育ちが違いますから、そのうち私にも悩みや反発心が生まれ、苦しい状態が続きました。そういう時には、「相手の立場を考えてみよう。自分だけで考えると一方的にな

る。」と自分に言い聞かせ、四、五年が過ぎました。

孫が二人目になったころから、嫁さんが心を開いて私に話をしてくれるようになりました。孫に対する私の愛情と嫁の愛情とは違うので、ある日、「本当の愛情とは何か」ということについて二人で話し合いました。すると、嫁さんは私の意見に対して、正々堂々と反対の意見を出しました。私の友達は、「あなたの嫁さんはおとなしいと思っていたが、案外ハッキリ物を言うんだねえ。」と申しました。しかし私は、嫁がまあこれだけ言う言ってくれるようになったなあと思つたのです。

「嫁と姑の問題」というテレビ番組を、昼食のあと二人で笑いながら見ています。どちらもそれぞれの立場上、観点も違いますが、具体的に言わなくともお互いが考えればそれでもいいと思つています。

ある夜のこと、お腹が痛くなった私は薬をもとと台所に行きました。テーブルの上に若夫婦の紺と赤のコップがあったので、とっさにそのうちの一つに水を入れて飲んだあと、「アリア、これは息子のコップだ。嫁のコップにはさわらなかつた。」と

気がつきました。そのことが寝間にはいつてからも気になっていました。「やっぱり私は、いまだに嫁を本当の娘のように思つていない。こりゃ悪いことした。」

翌朝ごはんの時、昨夜のできごとを嫁に話しました。「あとで悪いことしたと思つたよ。私、これからはとつさの時は、カーチャンのコップで水をもうと思うけどかまへんか。オバアチャンがあんたのコップを使つても、いやらしゅう思えへんか。」と言つと、嫁は、「そんな時にお水をのむんですから何でもエエ。あるもんでのんでかめへんやないか。」と言つてくれました。それから二人の間が非常にびつたりいきまして、仲良くやつております。

友達との会合でいろいろと雑談になりますと、よく「ウチの嫁は……」という愚痴が出てきます。みな年をとると、淋しさからつい出るのでしようが、それを聞いて家に帰る道すがら、私は「ウチは幸せやなあ」とつくづく思つたのです。

いつもお互いに筋の通つた正しい愛情をもって、なごやかな生活を続けたいものだと思つています。

(全体会議での発言から)

〈分科会報告〉

大阪市立大淀中学二年

三原 祥二

いま僕たち中学生が考えていることは、家庭内での親との意見のくいちがいです。

僕たちが何かを望んだ時、親はどのように対応してくれているでしょうか。親は賛成したり反対したりしますが、その裏にあるものを子供は敏感に感じとります。そしてその反応に対して、深く喜ぶこともあれば傷つくこともあります。

僕たちは今までそのような体験をいろいろしてきたわけですが、親をいまだ本当に理解しているとはいえません。僕たちにこれから必要なのは、親に一方的に望むことでなく、お互いに理解しあうようつとめることにあると思います。それにはまず自分が変わることに。それから相手も自分を理解してくれるようになるのでしょうか。

しかし、自分が変わっても相手が変わってくれなかつたらどうでしょうか。これについても話し合いました。僕はいまだに結論が出ませんが、日本の国の将来についても話し合いました。いま日本は世界からいろいろなことを学ばねばなりませんし、



●コーの報告をしてくれた中学生6人(右から3番目が三原君)。

ほかの発展途上国に対して技術的・経済的援助もしていかねばならないと思います。それには今まで日本が学んできたことを生かし、そして失敗してきたことなども充分に考慮して行動していかねばならないと思いました。

日本は原料を輸入して製品を輸出する加工貿易国です。その輸出入についても、日本はまだ少し勝手なところがあるかもしれせん。そのことからいろいろな誤解が生まれていることでしょう。ですから、日本がまず変わって、それから相手国も変わっていけば、世界の平和につながっていくと()ことを学びました。

1985 MRA国際会議のお知らせ

テーマ 多様性をこえた調和を

相互依存から相互貢献へ

- 新しいパートナーシップ
- 平和を求める青年の連帯と責任
- 対立に橋をかける産業の役割
- 家庭と教育の新しい役割を求めて

I 小田原会議(アジアセンターにて)5/3(金)~6(月)

II 関西プログラム 5/8(水)~13(月)

III 関東プログラム 5/15(水)~21(火)

誰もが参加して、自由な国際対話ができる会議です。
みなさまの積極的な参加をお待ちしています。
お問い合わせは、(社)国際MRA日本協会事務局へ。



十二月十五日(土)、東京の憲政記念館にて、社団法人国際MRA日本協会の第一回総会が開催された。高瀬会長の挨拶のあと議事に移り、昭和六十年度事業計画並びに昭和六十年度収支予算が事務局原案通り可決された。続いて第二部の文化講演会に移り、相馬雪香副会長(難民を助ける会会長)が、十二月三日の「社団法人設立記念レセプション」、一月のインドでの国際会議、六月のアメリカでの国際会議と続くMRAの最近の動きの意義を総括した。

承認された昭和六十年度の事業計画は次のとおりである。

昭和60年度事業計画(昭和60年1月1日~12月31日)

1. 第9回MRA国際会議 5月3日~5月21日
昭和60年度MRA国際会議は国際MRA日本協会設立10周年記念事業として開催される。海外からも約40名の参加予定。会議概要は以下の通り。尚、参加対象者は会員及び一般市民。

- (1) 小田原会議
- (2) 小田原国際ダイアローグ
- (3) 東芝労使との懇談会
- (4) 関経連との午餐会
- (5) 大阪青年会議所との交歓会
大阪青年会議所との共催による海外代表のホームステイ・プログラムも計画中である。
- (6) MRA国際会議大阪集会
- (7) ダイアローグ・イン・コーベ
- (8) MRA国際会議東京集会
- (9) 国会議員との懇談会
- (10) MRA国際会議埼玉集会
- (11) 科学万国博覧会視察
- (12) MRA国際会議茨城集会

2. 研究会・講習会・講演会等の開催

(対象は会員及び一般市民)

- (1) 文化講演会の開催
《概要》平和や相互信頼に関して社会教育の一助になるような文化講演会を地方で年数回行う。
① 福岡市 2月
② 大田原市 11月
- (2) カンボジア再建に関する研究報告会並びにインド国際会議報告会 2月
- (3) 家庭教育講座の開催 3月6日、13日、20日、27日の4回/11月3日、13日、20日、27日の4回
(講師)山崎房一氏(当協会理事、新家庭教育協会理事長)
《概要》子供を変える父親講座と母親講座をとりまぜて、合計4回の講座を3月と11月にそれぞれ行う。
- (4) 第八回MRA関西秋期大会を開催 10月5日~6日
- (5) アジアと難民に関する講演会を開催 10月
(講師)相馬雪香氏(当協会副会長、難民を助ける会会長)
- (6) 月例会(関東・関西で毎月開催)
- (7) 婦人会(年8回開催)

3. 人材の養成・訓練・研修

《概要》国際事情・外国語・マナー等に関する国際人教育を通して道徳的人格的研鑽を深め、帰国後日本での社会教育の推進に役立つような人材を育てる。

- (1) インド・トレーニングコースに海外留学生を派遣(1名) 1月1日~5月31日
- (2) オーストラリア・トレーニングコースに海外留学生を派遣(1名) 6月10日~12月31日
- (3) 「日本スイス青少年交流使節団」の中学生をMRA世界大会(スイス)において研修すると共にホームステイ・プログラムの援助をする。7月~8月(関西日本スイス協会と大阪市教育委員会との共催)
- (4) MRA研修生をMRA世界大会にて研修(スイス・コー) 7月~8月 尚、派遣する学生等は機関誌を通じ一般公募のうえ選考する。

4. 海外との交流

《概要》毎年スイスで開かれる世界大会をはじめ各国で開かれるMRAの国際会議に代表を派遣するほか、各国との緊密な民間交流を推進する。また最近多くなった日本及び日本の文化や教育に関する視察や研究者を迎え日本を正しく紹介し、平和に貢献する。

- (1) インド国際会議に日本代表を派遣(於バンチガーニ) 1月(テーマ)「開発への対話」V
- (2) MRA世界大会に日本代表を派遣(スイス・コー) 7月~8月
- (3) 九州MRA協力会第15次視察団を韓国に派遣(京城・釜山・慶州など) 9月
- (4) その他オーストラリア・イギリス・タイとの交流も計画中。
- (5) 平和や道徳・相互理解に貢献する海外の方々を数名招聘する。尚、派遣する代表は会員及び一般市民から公募する。

5. 研究・調査

- (1) ヨーロッパの平和・道義に関する研究・調査 8月

6. 出版

- (1) 機関誌の発行(年6回)
- (2) 国際MRA日本協会10周年記念出版

7. その他の事業

チャリティ・バザーの開催(対象・会員及び一般市民) 3月及び11月

（株）ケンブリッジ・リサーチ
研究所
「今井 正明」

私が最初にコーの名前を耳にしてから四十年近くになる。長野県の上田高校の卒業直前であったと思う。当時写真で眺めた山腹にそそり立つマウンテン・ハウスの威容は、私にとって新しい世界の象徴であり、また山奥の田舎の高校にいて、これから大学へ進み、さらに新しい人生を国際的な舞台で切り開こうとしている学生にとっては、未来を暗示する象徴とも思われた。

今回、思いがけなくもそのコーを訪問する機会が与えられ、四十年のタイム・トンネルを一気に戻ったような気分を味わっている。私は、一九五七年から五年間、アメリカで生産性本部の仕事に従事した後、日本に帰って、ケンブリッジ・リサーチ研究所を設立し、経営コンサルティング事業をはじめ、人材の紹介や育成、さらに近年は「日本の経営」の海外への紹介などを手がけてきた。

このような関係で、本年五月末にMRAの国際会議への海外からの参加者に対して、藤田幸久氏の特

「長」についてお話しする機会を与えられたわけだが、出席者のヴァンダ・ウォーター氏やモアア氏等のすすめもあって、本年のコーの産業人会議で再度お話をする機会に恵まれたわけである。

本年の会議の主題である「創造性——危機に対応する解答」をうけて、私の話の主旨は、日本の経営の本質は「改善思想」にあるということであった。第二次大戦後の日本企業のみざましい発展ぶりをみて、海外でみざましい角度から解釈がなされてきており、「労使協調路線」・「品質管理」・「生産性運動」や、日本の終身雇用・年功序列の制度に解答を求めようとしたり、もっと最近では、QCサークルに着目したり、みざまの解明が試みられてきている。これとの関連で、「セオリZ」などの本も出されている。

これに対して、私の主張は、日本に特有な改善思想が、これらすべての現象の背後にあり、改善とはすべての人の努力により、毎日少しずつ現状の打破と改善をはかってゆくものであるという点にある。

もう一つの私の論点は、西欧には改善思想は余り強くなく、その代りに革新（イノベーション）思想があると

思想とは、進歩には大規模の投資と技術革新を必要とするという考えである。これに対して改善思想は、現状に立って、現状を容認しながら、どうしたら少しでもよくしてゆく事ができるか、すべての人が参加して努力することである。

企業の経営にも、革新と改善の両方がともに必要であるが、西欧には後者が欠落していることが最大の問題と思われる。

私のこの論点が真剣に受けとめられ、また多くの質問が寄せられたことは嬉しいことである。フレデリック・フィリップス氏（フィリップス社元会長）から、「この改善思想を、あなたは個人的にどのように実践していますか」との質問を頂いたことは、私にとって最大のチャレンジであったと考えている。

産業会議には、世界の多くの国の代表が出席されており、とかく井の中の蛙になりがちな私達にとっては、大きな刺激であり啓発であったと思う。侵略を受けた後のカンボジアの厳しい状況、英国の炭鉱・港湾ストライキ、東欧の政治問題、南アフリカの人種問題、チベットから亡命を続けるダライラマの近況、インドの貧困等々、壇上での話は、いずれも大きく変わりつつある世界史一コ

マーマそのものであった。と同時に、次第に発言力を増しつつある日本のかかわりと責任を痛感した。

日本からの出席者の中には、東芝の労使代表や総合労働研究所の海外研修セミナー視察団のメンバー、竹本孫一氏や学生など多数参加されて、日本を代表しての発言をされたことは、会議の雰囲気を大きく盛り上げたと思う。また、相馬雪香氏の難民援助のための国際的な活動は、大きな共感と感動を呼んだ。

同室したイエンツ・ウィルヘルムセン氏には、朝起きるや、コーヒーを用意していただいたことをはじめとし、心のこもったもてなしを受け、忙しいスケジュールの間をぬって、家族のことなど話し合ったことは、なつかしい思い出である。食事やお茶の時間にも、みざまの国の代表と腹を割って話し合う機会が与えられた。今までみざまな国際会議に出席する機会があったが、あらゆるバックグラウンドの人が相集い、職業をこえ、階級をこえ、「平和」を語り、「愛」について語り合う機会を与えられたコーの会議は、まことにユニークであり、このような機会を提供して頂いた藤田氏をはじめ、MRAの皆様にご心からお礼申しあげる。なお、終りになったが、改善思想

は、企業経営の場だけではなく、行政や教育、さらに社会主義国においても活用の余地のある思想であり、私達の個人の生活の場でも導入すべきであると痛感している。

東芝小向工場勤務主任 田中 孝明

八月上旬のある日、上司から、MRA産業人会議に東芝から労使で構成する代表団を派遣するので随員も兼ねて出張するよう、指示をされました。MRA自体については、若干の知識はあったものの、自分の担当業務とは直接関係があるわけでもなく、業務多忙な時期でもあったため、戸惑いを感じたものでした。

八月二十四日夕方、我々一行六人は、荒涼とした中近東での出張を終え、砂漠の国々とは、好対照な美しい緑の国スイスはチューリッヒに到着。美しい田園風景の中、一路コーに向いました。モントルーで汽車を降り駅前からタクシーに乗ったものの、ドライバーは英語がわからず、マウンテンハウスと言っても通じない。住所を見せてやっとな出発。急な坂道を登り頂上に近いコーに近づくにつれ、「峠の我家」にも似た暖かい雰囲気を感じられ始めました。

二十分後、我々はうす暗闇の中、黄色い灯の光るマウンテンハウスの

玄関に到着した。タクシーのドアが開くと同時に、各国の参加者の方々が親切にも出迎えてくれました。夜の八時過ぎにもかかわらず、用意していただいた夕食、質素ではあっても清潔な部屋、廊下の一隅に何げなく生けてある花、通りすがりに挨拶をかわしてくれる参加者の方々。マウンテンハウスには、忘れていた人間の暖かさがあり、その中に何の抵抗もなく包まれていく自分に驚きを感じたものでした。

四日間のマウンテンハウスでの滞在で感じた点につき二つ程述べたいと思います。

第一に、「日本人の勤勉性」について――不況に悩む諸外国のスピッチの中には、間接的ではあるが、日本が失業を輸出しているとの批判がありました。勤勉性、それは日本人にとっては美德であっても、諸外国からは、必ずしも良いものとは評価されていないようです。

第二に、日本人の失ったものについて――日本人は、一生懸命働いてきて豊かになったものの、心の支えを失っているのではないのでしょうか。西欧では、宗教という大きな支えが基盤としてあり、経営にも大きな影響を与えています。無宗教といつてはばからない日本人にとって、本来、

その行動規範は、道徳にあるはずですが、MRAの絶対標準へ正直、純潔、無私、愛は、キリストの「山上の垂訓」からきているようですが、これは我々も、かつて小学校の道徳の時間に教えられたものです。他人への思いやりについても、家庭で、父親からまず教えられたものでした。私事ながら、小生の愛娘はまだ10カ月ですが、我子に対する自分の気持は、まさに絶対基準に合致していると思います。この気持ちを少しでも他人に対し持ち続けていきたいものです。

働き過ぎの日本人は、忙しさの中で心を失っているのかも知れませんが、一日一善とは平凡な聞き慣れた言葉ですが、なかなか実行するのは難しいことです。QUIET TIMEをまず一日1分でも持ち、今日一日なにができるかを自分の心に問い、一つでも実行する、このことだけは是非やっていきたいと思えます。

末筆ながら、今回我々のお世話をしてくださった、(社)国際MRA日本協会の皆様、並びに関係者の方々は、貴重な経験をさせていただいた事に対し心から御礼申しあげます。近い将来愛娘と妻と共に、コーの地に行き同じ経験を是非味わせてやりたいと思えます。

MRA国際会議の御案内

国名	テーマ	時	場所
アメリカ	"MAKING A WORLD OF DIFFERENCE" (自由と調和と思いやりのある社会を求めて)(仮題)	昭和60年 6/15(土)～23(日)	ワシントン (ジョージ・タウン大学)



●コーの大会議場にて(左端が田中さん)

アフリカ難民救済に先がけて

藤田 幸久

満五周年を迎えた「インドシナ難民を助ける会」（相馬雪香会長）は、これを機会に「難民を助ける会」へと「改称」し、活動範囲をアジアから他の地域へと拡げることになった。

その手始めとして、五百万人ともいわれる難民をかかえ、一億五千万人にもものぼるといわれる人々が飢餓に悩むというアフリカに援助を差し

のべることとなり、今回私（同会幹事）が、そのプロジェクトのフィジビリティ・スタディのためにアフリカに派遣されることになった。

お腹がふくれ、手足が針金のように細く、顔にたかるハエを振り払う力もないまま砂漠で死んでいく子供をテレビの映像でながめて、そのとりくむべき相手の大きさを考えれば

考えるほど、「焼け石に水」のように一過性に消える援助ではなく、細くとも長続きのする地道な援助を模索したいという思いが増した。

至る所難民だらけというアフリカ諸国の中から、私達は敢えてエチオピア・ソマリアなど惨状が伝えられる国々を避けて、ジンバブエとザン

ビアというアフリカ南部の国々に的をしぼることにした。理由は次のとおりである。

一、既に進出している国際救済団体の数が比較的少なく、日本からの「新参者」が出ていっても、それなりに独自の活動が行える。

二、欧州と違い遠方から出かける日本としては、援助物資をなるべく現地で購入する必要がある。

三、両国とも、難民援助と、アフリカには欠かせない地域開発・地元への還元とが並行して行いやすい国である。

四、比較的政治的に安定している。

五、ジンバブエでは、MRAチームが各界各層で活発に活動しており、ザンビアでは、昨年一月まで国際MRA日本協会で活躍した寒河江亮さんはじめ六十余名を擁する海外青年協力隊があり、共にその協力が得やすい。

実際アフリカの地に着く前に、私はMRA世界大会（スイス・コー）のアフリカ・セッションに参加でき

るといって幸運を得た。それは初めて出かけるアフリカの文化・習慣などについて直接話が聞けるという以上に、コーのアフリカ・セッションならではの次のような特徴があったからである。

一、コーは、ほぼアフリカの全てが一堂に会せる数少ない場所である。

（黒人・白人・仏語圏・英語圏、回教国・東アフリカ諸国などが、アフリカ大陸内で一堂に会することとは不可能である。）

二、コーは、アフリカの良い点を建設的に、しかも未来に向かって率直に語れる数少ない場所である。

三、コーでは、アフリカ人同士が自分の種族や色を越えて、まるで「アフリカ合衆国」のように今



来を連帯意識をもって論じあう。ミーティングの終わりに、アフリカの共通国家「コシケレ・アフリカ」がしばしば違った言語によって歌われた。

四、コーでは、山積するアフリカの問題の現象ではなく、その最も根底に横たわる根（人の欲望・恐れ・嫉妬）の解決を模索している。

私は、コーでアフリカの「未来」を垣間みた気がした。悩みや問題ばかりがアフリカについて語られる今日、そして難民救済という気の遠くなるようなプロジェクトの調査に旅出つ前に、こうした「視点」をコーで得たことは、難民問題がアフリカの未来という座標軸と密接に係わっていることを認識できて、大きな励みとなった。

私がコーに在る間に、「難民を助ける会」ではテレビ、新聞等を通じてボランティアの募集を開始していた。飛行機代を二十万〜三十万自己負担する、という呼びかけに対して、数週間のうちに二百八十名の方が日本全国から応募していた。看護婦、保母、測量士、自動車修理工、建築家など年齢も十代から七十七才の人までおり、海外ボランティアの経験者も相当混じっていた。相馬さんが五

年前に唱えた「心の開国」と「奉仕する日本人」が、日本全国で大きな流れとなった証であると思った。

実際初めて私がアフリカの大地に足を踏み入れたのは、九月一日の早朝であった。十年來の親友アレック・スミスがすぐにホテルに現れた時、私はジンバブエが旧知の国であるような錯覚にとらわれた。人を知ることが国を知ることへの近道」が持論の私には、既に多くの友人がこの国にいたからである。

一時は麻葉まで極めて、父親のイアン・スミス(元首相)の「頭痛の種」であった彼が、MRAに会ってチェンジをし、白人少数政権の権化であったその父親を説得して、黒人多数派政権への無血による移行を「勇断」させたのは、もう七八年前のことである。四年前の独立前夜に一部の白人強硬派による不穏な動きを知り、イアン・スミスとムガベ現首相を引き合わせ、クーデターを未然に防いだのも、彼と彼の信頼する黒人とのチーム・プレーであった。多くの犠牲を経て成立したこの独立は、多人種国家という未来を表わしており、日本のボランティアは、その未来へのかけ橋となるのである。ジンバブエ政府との交渉で感じた

ことは、「**頂を尊ぶ**」ということ
で、私はむしろそのことが新鮮に感じられた。「日本から、自己犠牲を払った若者が、商売が目的ではなく、謙虚に学ぶ気持ちと技術を持って、奉仕にきてくれる」——それ以外の何物でもない、という動機がはっきりすると、心を開いて「国造り」について熱っぽく語ってくれた。

迎える側も出向く側も、正しい動機と新しい気持ちが必要であるところづく感じだ。日本側にしても、「何もなかった後ろめたさ」からインドシナに出向いた数年前と違い、今度は自らの意志で、自らの決断で、新しい道を切り開く時である。

ムガベ首相夫人が、「MRAの融合の精神を援助に生かしてほしい」と述べられたのが印象に残り、また、帰国後ザンビアのチャリクリマ駐日大使が、「MRAがマオマオ族と白人の和解をケニアで推進したように、再び新しい流れをアフリカに吹き込んでほしい。」と話された時には、私は身の引き締まる思いがした。「心の開国」をした日本のボランティアが、自らの意志でアフリカに出かける時、その裏づけとなるのは、一人一人の「生きざま」しかないからである。

その後、難民を助ける会
一月七日にジンバブエへ派遣された
十四名のボランティアの皆さんは、
モザンビークとの国境にあるトンゴ
ガラ難民キャンプ(一五、〇〇〇人
収容)で、①木工・水利班、②農業
班、③保健・栄養班、④医療班、⑤
教育・文化班に分かれて、活躍を
されています。

“Now I call him
BROTHER”

by Alec Smith
(英語)

発売中!!

(定価1,000円)

黒人と白人との橋渡しを担って、無血独立の推進力となった“ジンバブエの勝海舟”アレック・スミスの生涯は、イギリスBBCテレビで大きなセンセーションをまきおこしました。この彼の手記は今欧米でベストセラーとなっています。

ガイダンス・5

「4億3千万の脱税」が発覚したというニュースがあるかと思うと、「中学生が飲酒の上、先生に暴行して死なしてしまった」といったショッキングな報道が矢つぎばやに耳目をアタックする——昭和60年度は、このようにして始まりました。

読む方も聞く方も、慣れっこになってしまったのでしょうか。しかし、誰ひとりこれでいいと思っている人はおりません。ただ、自分にはどうすることもできやしないという投げやりの気持ちにおされ、あげくの果てに「関係ない」と思ってしまうとしたら大変です。

例によって、社会が悪い、何が悪いと責任のなすり合いに終わるのではなく、社会を構成する一人として、新しい生き方をしようと決心する、そこにMRA的に生きる始まりがあるといえます。自分の中にもごまかそうとする小さな芽があるのを見て、人を責めるのではなく、自らを卑下するのではなく、新しい生き方・考え方をしようと決心することに意義があると、ブックマン博士は言われます。

そして新しい決心をして、どんな小さなことでもいいから、(本当は、この小さなことが大切なのです) 実行してみる。すると、新しい清水が湧き出るようなすがすがしい気持ち(人によっては、「心が自由になるって、こんな素晴らしいものか」と表現していますが)になるというのです。しかも、自分が救われるというだけではなく、それが途方もなく大きいもの、つまり社会の改善につながるところに、MRAの妙味があります。

いいわけをやめて、心に響く声に従ってみて下さい。「とても出来ない」は、「やってみない」に他ならないのです。

新しい精神が生まれ限り、私たちは自分たちの利己心の高い代価を払わねばならないでしょう。



家庭教育講座第二回開講のご案内

(日 時) 3月6日、13日、20日、27日の4回、それぞれ午後1:30~4:30
 (場 所) (社)国際MRA日本協会会議室
 (定 員) 20名(定員になり次第メ切らせていただきます)
 (受講料) 3,000円
 (講 師) 山崎房一 (当協会理事、新家庭教育協会理事長
 「お母さんこうすればわが子はみるみる変わる」の著者)



新家庭教育協会理事長
山崎房一

講座内容

- 第一講 子供の能力開発法、他
- 第二講 効果的コミュニケーションのコツ、他
- 第三講 記憶力・理解力・創造力は安心感から、他
- 第四講 意見の対立の効果的処理法、他

NHKや新聞各紙で好評の父親講座と母親講座を合わせて開講することになりました。お子さまのことで悩み、迷い、心配している方々に、教育に対する自信を与え、子供の心に安心感とやすらぎを与えます。独身の方も大歓迎です。受講ご希望の方は早目に事務局へお申し込み下さい。

心に残る言葉

たつたひとこと
はげましと優しい言葉
そのひとこと
アツと言つ間に消えてゆくのでしょ
うだが
其の言葉が消え去つたあとも
何とも言えぬ嬉しさが
胸一杯にふくらんできて
ようごひの思いが
ブルブルと駆けめぐって
止まるころを知らないのです

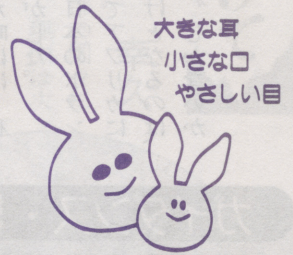


(ジェームズ・フォーリー作)
兼 松 正 訳

小さな小石を ひとつ
水の中に落とすと
パツとしぶきをあげ
すぐ見えなくなりますが
それは何十というさざなみになつて
輪をえがき
次々と広がって行くのです
一粒の小石のつた小さな輪が
流れ流れて
海にまで行くのです
その最後の行く先は
調べるすべもありません

あなたのかけた
慰めのひと言
その言葉の波が
心地よい音の調べとなつて
伝わってゆくのです
たつたひと言
あたたかい優しい言葉
その言葉が
幾マイルも幾マイルも
広がっていくのです
幾マイルも幾マイルも
無限の彼方に!

大好き お母さん



家庭教育講座の標語

事務局近況

◇一月から、事務局に館^{たち} 松夫^{まっお}さん (六十五才) が来て下さることに なりました。経理に、編集に、名簿作りにと豊かな経験を生かして いたかどうかと、私たちは大いにたよりにしています。

◇四月から事務局を手伝ってくれて いた杉裕雄さん (二十才) は、青 年のためのMRA研修受講のため、 一月十七日にオーストラリアへ向 かって出発しました。これで事務 局の平均年齢がグリーンと上がった のは残念ですが、杉さんが国際人 として立派に活躍されることを祈 っています。

◇英国に一時帰国しているクレイグ さん一家に、十一月二十八日、二 人めの男の子が誕生! 三月にはこ のリチャード君の加わった一家四 人で、再び日本の土を踏まれる予 定です。

おわび

前号では、寄稿して下さった方々 のお名前や学校名に誤りがございま した。ここに訂正させていただきます とともに、深くお詫びを申し上げます。

喜幡久敬 ↓ 嘉幡久敬
暁星学園 ↓ 明の星学園